

を仕入れ、家の軒下で売り始めた。一日三回歩いて野菜を仕入れ、売り捌く。次に古い自転車を買えず賃借りし、次に太いタイヤの二〇貫積める自転車を買う。

次に昭和二十八年十五万円中古自動車を買ひ、東京の鮫州へ免許を取りに行きました。初めは自分の食料品を運搬し、八百屋をだんだんと広げ、他の人の物の運搬をしたりしつつ、現在に至っています。

戦後の苦勞を子供や孫に話をするので、今皆、良くやってくれています。私は軍隊でも、外地でも、終戦後、引揚者として苦勞しましたが、子供たちは幸せであります。

軍隊は運隊だ

北支特別警備隊

栃木県 増 淵 明

私は大正十年十月十日に生まれました。現在は市町村合併で大田原市ですが、昔は那須郡親園村大字宇田

川といっていました。家族は両親と祖母の四人家族で、私は一人息子でした。長閑な田舎で、家の前に山あり裏に小川ありで、その川には鳥貝や天然記念物の都たなごが生息し、人情味豊かな素朴な農村です。家業は農業で田畑二町六反くらいで、生活程度は中位でした。村立小学校を卒業後、高等科は大田原の学校を卒業し、家族四人楽しく暮らしていました。

適齢期になり村役場の兵事係から呼び出されまして、翌日の徴兵検査について諸注意を受け、村から十三名が受検しました。私と増淵四郎君と二名が甲種合格となり、嬉しさで万歳をしました。他の十一名はなんだか淋しそうでした。私も夜、家で親の心を思うと、どのようなことでも辛抱して頑張って絶対戦死せぬように無事に務めを終えて帰るのが一番親孝行だと思っていました。

昭和十七年三月十日、近所の人たちに盛大に見送られ、宇都宮の第十四師団留守部隊に現役兵として入営しました。初めに想像していたより待遇が良いので、ちょっと安心していましたら、一週間で外地に出動を

申し渡されてびっくりしました。外地部隊から古參軍曹が初年兵受領に來られました。私たちは「氣を付け」で不動の姿勢だけしか知らず、満足に行進もできなかったが、その私たちを整理させて「貴様らは同期の戦友だ、これから自分が外地に引率していく、郷土の名を辱めることなく、全員協力して頑張れ」と言われ、自分たちで小隊、分隊の編成をして、桜花満開の宇都宮部隊の宮門を後にして、歩武堂々と駅に向かって行進しました。

駅頭には見送り人垣と日の丸の旗の波でした。汽笛一声汽車は一路西を向かって走りだし、下関に着いたころは、乗り物疲れて辟易していました。乗船命令で船に乗りました。普通船と異なり兵員輸送のために内装された御用船だったように思います。狭い所に詰め込まれました。

玄界灘は聞きしに勝る荒海でした。朝鮮の金山に上陸して列車に乗り、何十時間か過ぎたころから「これが鴨緑江だ」「ここから満州だ」と言う声があり、新義州を通過し何時間か経過したとき「山海関だ、いよ

いよ支那大陸だ」と言う声が聞こえました。

列車は驀進に驀進をして何十時間か走って停車しました。これまでも何度も何度も停車の繰り返しでしたが、ここが終着駅でした。「全員下車」の号令で降りた所が支那山西省洪洞県きょうとうです。第四十一師団歩兵第二三九連隊（通称号、河第三五六六部隊）です。部長に申告して各人の配属が決定しました。自分は第二大隊第二機関銃中隊大隊砲小队と決定しました（基本は歩兵です）。ちなみに砲と名の付く隊は野砲、山砲、機関砲、大隊砲その他ありますが、みな体格が大きき力の強い者で編成されるのですが、自分は一番小さくて、昔から「チビ」と呼ばれていました。でも体力と根性は他に負けぬ自信があり頑張りました。

教官、教育係下士官、教育助手にことあるごとに、「気様らは現役だ、張り切って頑張れ」と叱咤激励されました。内務班では二年兵や先輩からも私的制裁で相当厳しく責められましたが、自分流に受け止めて頑張りました。

当時の楽しみは、一週間に一度の甘味品として羊羹

や饅頭の配給があったことです。あの味は今も思い出します。一期の検閲も無事終了しました。今までは警備区域内での教育訓練でしたからまず安全地帯です。しかし検閲後は一般本科兵として取り扱われます。

「初年兵よく聞け、ここは敵地で、敵の包囲下でいつ、どこから弾が飛んで来るか、敵襲があるか不明だ。絶えず敵の目が光っていると思って行動せよ」と厳しく言い渡されました。

以後、単独行動は厳禁で、分隊行動となりました。小部落に一個分隊で治安警備に就きました。いつ蔣介石軍、共産八路軍が襲撃してくるか不明です。敵は地の利を得ている。その上、部落民が内通しているから油断大敵でした。街の名前は忘れましたが、住民が全部逃亡して無人になっているのに、煙が立ち上っているとの通報で一個小隊が出動して斥候偵察をしますと、八路軍が一個中退（四百名）ほどで食事中でした。一人の兵隊が慌てて手榴弾を投擲したため、敵は驚いて退去していったのです。我が小隊は無血入城でその街へ入りましたが、一度逃げた敵が日本軍少数と見て再

び反撃してきました。

我が軍の戦死四、傷者多数で惨憺たる状態でした。無残なのは一人の上等兵が丸裸にされて、クリークの側で戦死していました。また戦友の岡田は、どこへ行ったのか不明で探していたら、大きな土饅頭の側で半身爆風でやられ、内臓が飛び出して「苦しい、苦しい」と唸りながら息を引き取りました。名誉の戦死です。同年兵の高田は右手首を吹き飛ばされて重傷を負っている。二人は土饅頭を盾にして交戦中、敵の投げた一発目の手榴弾は爆発前に投げ返したが、二発目は投げ返す瞬間に爆発しました。そのために右側にいた岡田は爆風で飛ばされ、手榴弾を手にした高田は重傷を負ったのです。二人共、紙一重の運命でした。

岡田の遺体を部隊に持ち帰り、同郷の戦友であるから私は一夜屍衛兵として立ちました。翌日隊員に見送られて茶毘に付しました。岡田は母一人子一人の母子家庭でした。万一自分が郷里の土を踏むことができたら、何と云ってお知らせできるかと、断腸の思いでした（戦後復員時には、御母堂は逝去されていました）。

彼の遺骨は城門内の左十メートルの所に埋葬してきましたが、五十余年過ぎた今も、あの情景が眼底に焼き付いています。

当時の食料はゴツゴツの高梁飯です。まあ腹いっぱいではなくとも、まあまあでした。医薬品は充分ではないが足りていたようでした。

昭和十八年十二月、命第七二八号で第八方面軍の指揮下に入りました。自分はその時ちようど一選抜上等兵で渡辺（栃木出身）と二人で、現地召集兵教育係をしていますが本隊より置き去りになりました。自分のほか、残留者は追及できなくなりました。その後本隊は、ニューギニアで多大な犠牲者が出て苦戦したとのことです。自分たちは独立混成旅団へ転属になりました。

少数の転属者は、その本隊の者と比較されて継子苛めのごとく、常に冷や飯を食わされ、全員進級停止でした。自然やる気を失い、気力喪失でした。朝夕の点滴も「練兵休だ」と言ってさぼり、討伐作戦にも出動せず、一選抜の現役兵を残飯兵扱いされたことで、自

分たちは抵抗したのです。三カ月ほどしてから、また他部隊へ転属させられました。まるで員数合わせ要員のようにでした。

その部隊の人事係曹長だけは記憶が鮮明にあります。一度呼び出しがあったのですが行かなかったのです（この時点では破れかぶれで軍法会議でも宮倉でも勝手にせよと太平楽を決めていました）。再度当番兵が呼びに来ましたので不精無精曹長の所へ行きました。

「増測、俺と一緒に一杯飲め」と高梁酒（現地の地酒）をすすめてくれました。自分も度胸を決めて、酒を飲みながら、一言啖呵を切りました。「自分たちは冷や飯食いの役立たずです」と。いろいろなことを曹長に話し語り、数時間を過ごしました。そのうち自分も少し心が解けてきました。曹長が「おまえの気持ちはよく分かった。今から先、お前の命を俺に預けろ」と言います。世に言う（男と男の付き合いだ）と言う次第でした。

その後、炊事係として勤務を命ぜられ服務しました。炊事係の所には将校当番や古參班長などから、いろいろ

る頼まれることがあります（戦場にあつては食うことが一番楽しみである）。

あるとき、「鬼軍曹」といわれる班長から頼みがありました。兵隊から恐れ嫌われていた軍曹です。仇討ちのつもりで拒否しましたら、「俺の言うことが聞けないのか」と脅かされましたが、自分はあくまで筋を通したために、彼も反省したごとくになり、最後は頭を下げて「増淵よ頼むぞ」と言って、お互いに心が通じ合ったものです。

炊事場には中国人の手伝いが何人かいましたが、彼らの面倒もよく見ましたので、自分にも好感を持って、実にまじめによく働いてくれました。

以上のように自分の勤務態度も変化して成績も良くなり、兵長に進級しました。

芝野曹長は銃剣術の達人だったので、自分もその薫陶を受け銃剣術に熱を入れ、最後には三本に一本は勝てるように上達しました。「男伊達」ではないが、上官風を吹かして下の者を苛める者には抵抗しましたが、下の者や働いている中国人は庇い親しくしました。現

地人を苛めるようなことは少しもしなかったのです。

自分は芝野曹長によって更生しました。今もその恩は心に深く残っています。…かくして三度目の転属命令が出ました。その部隊は「特警でした」。

〔註〕

戦史によると「特警とは、昭和十八年八月二十四日に臨時編成された（軍令甲第八十一号）北支特別警備隊のことである。

当時、満州や北支から日本軍を駆逐しようと、蒋介石の国府軍と毛沢東の共産八路軍が、日本軍が統治している地区の治安を攪乱すべく、各地区に遊撃戦やゲリラ戦を展開していました。これらに対応するため、北支那方面直轄の北支那特別警備隊（五個大隊）を編成しました。

通称号「甲一四二〇部隊」で、司令官は加藤泊治郎陸軍中将でした。憲兵科と一般兵科混合なる治安作戦部隊でした。軍司令部、教育隊は北京、第一大隊は河北省唐山にあり、第二大隊は山東省徳県、第三大隊は河北省豊潤、第四大隊は河北省石門、第五大隊は河

北省通州と北部支那の主要拠点に配備されていた。

自分は特別な任務に就くためなので、司令部の教育隊で六カ月間の特別教育を受けました。まず言語（簡単な日常会話）風習を習熟しなければなりません。また、偵諜だから、身に寸鉄を帯びてはならない。どんな時でも死を覚悟して臨まねばならないのです。

特警には「偵諜」と「剔抉」と二つの部署があります。わずか半年くらいで教育が完成するような任務ではなく、三年も五年も養成せぬと万全ではないのです。自分たちのような半年ばかりの教育では満足な活動は望めないでしょうが、全員一生懸命、真剣に勉強しました。

いよいよ街に潜入となり、金持ちで大の親日家の油屋の裏座敷を借りて、部下二名と居住いたしました。一人は町工場に、一人は商人としてそれぞれ勤めました。自分は勿論名前も中国名で頭髪も伸ばして七・三に分け、服も中国服で、禪を取りズモンを直接はいていました。原隊に帰ることは禁止され、内密の連絡方

法で命令受領や報告等の交信をしていました。

自分は郵便局が主勤務場所で、怪しい小包や封書等の内容を検閲しました。局長は大の親日家で京都の大学を卒業しています。また自分のことについても、局長以外だれ一人も、自分を日本人だとは知らなかったのです。

知事が退官のときも憲兵隊長と一緒に招待されました。学校の先生をしている局長の娘さんの婿養子にも請われましたが、私は一人息子だと言って断わりました。

栃木の親元には立派な衣服、チョッキや土産物を送って来て、「子息を娘の婿にとの手紙が添えてあり、両親には経済的に応援する」と書いてありました、と帰国後に聞きました（人の信頼や心の結び付きは、国境や民族の壁は無に等しい）。

私の特警での任務は、単に支那人を利用して情報入手するということだけでなく、いかに支那人と相互親密信頼感を持ち、信じ合うかということでありました。支那人は本当に日本人に似ています。だから支那

人を苦しめたり侮辱する日本人には強い反撥を感じます。上官であっても同様でした（一人よがりの正義感だろうか）。

右のような苦勞は他の一般兵科において、味わうことのできぬ精神的な苦勞で、筆舌にて表現することはできません。体験者のみ知ることです。

当時の北支は蒋介石の国府軍、毛沢東の共産八路軍、日本軍と三者入り乱れ「打倒八路軍」「打倒国府軍」「東洋鬼」「日本鬼」などと塙や壁に書かれていました。日本軍が来れば「日の丸」を振り、八路軍が来れば「赤旗」を立てて、住民はその時その時においての平和を願っているようでした。

しかし裏では抗日運動は盛んでした。昭和十九年になると、北支軍の主力部隊は大陸打通作戦に参加しました。従って治安兵力が弱小化しました。共産、国府軍の各地での後方攪乱活動が盛んになることが予想されました。そのため、治安活動に成果を挙げている特警兵力を強化するため五個大隊が新しく増強されました。計十個大隊、総兵力一万七千名となったのです。

編成完了は六月ころでした。

第六大隊―太原、第七大隊―濟南、第八大隊―開封
第九大隊―秦皇島、第十大隊―河北省灤県に、それぞれ配置され北支全域にわたり新警備態勢が完備しました。その他北京、天津、濟南には特別情報隊の特丸隊等が置かれ、各種の任務に活動しました。

一例を挙げますと、敵スパイの発見、暗躍の阻止、破壊工作封殺、諜報網の破碎、アジトの急襲、秘密工員（モウ）の剔抉（拉致、監禁、抹殺）、主要軍事施設の防衛等を任務とし、商社員、苦力、人力車夫、華北鉄道員などに変身して活躍しました。自分もその中の一員であったのですが、復員後にその全貌を知ったのです。戦闘部隊と異なり、日・中・共と三者入り乱れた泥沼の中に暗躍した陰の軍人でした。

初代大隊長は天野輝・憲兵中佐。次いで田坂少佐。その次が染谷孝一憲兵少佐でした。中隊長、小隊長は主として歩兵将校で、対遊撃隊を除く各班長は憲兵下士官でした。遊撃隊は戦闘が主任務です。憲兵科と兵科とに分かれ、特別な組織として情報、偵諜、宣伝、

宣撫など各班がありました。

第五大隊は、甲第一四一八部隊で、総兵力一三〇〇名で、本部と五個中隊の編成でした。敵の幹部は我が部隊のことを『一四一八（イースーイーパー）』と中国読みし、また『一人の憲兵が四人の密偵を使い、さらにその四人の一人、一人が八人の密偵を使っている、恐るべき武力諜報集団だ』と上手に表現していました。

大隊本部は通州県城内にあって、通州、三河、平谷、薊縣、寶坻、香河、武漢、安次などの各県にわたる広大な警備区域を受け持っていました。また中隊や小隊の分遣隊がそれぞれ重要拠点に配備されていました。大隊の戦歴を言いますと、概要は次のようです。

編成完了一カ月後、第一期作戦開始。通州から河北省燕京地区に進駐した。

昭和十九年二月、特警十個大隊に増強す。六月十日第一期作戦終了、引き続き第二期作戦開始。十一月河北省三河県白塔辛庄付近の戦闘で、第六十三師団（陣部隊）に協力して活躍し師団長賞詞を受誉す。

昭和二十年四月、同部隊と燕京道作戦参加。同五月終了。六月原隊復帰。唐山転出。七月豊潤県進駐。八月十五日、終戦の大命拝受。

思えば昭和十七年三月、山西省洪洞県、河三五六六部隊で初年兵教育を受け、以来三年有半の軍人生活を振り返れば、幾度となく死線を彷徨したことか。ある時は就寝中の深夜、強力な敵襲を受け、我が小隊は壊滅状態に叩かれ、戦友と共にクリークを渡河して退却しました。氷点下の渡河でしたから、陸に上がった瞬間に軍服が凍ったことも思い出の一つです。また一生懸命頑張って一選抜上等兵になり、教育係として本隊に置き去りにされ、当時は随分怨んだものでした。今思えばその後の苦勞も勿論ですが、本隊はニューギニア島で玉碎戦闘を敢行せしとか。天命と言うか、軍隊は本當に運隊だと、私の実感です。

昭和二十年九月二十六日、唐山に各部隊集結しました。何個師団か不明でしたが、数万名の軍隊のようでした。中国、国府軍によって武装解除され、天津の貨物廠糧秣倉庫に抑留されました。その間、特警の戦友

の中から、戦犯容疑で連行された者が幾人かいました。十二月、塘沽の港から、米軍の上陸用舟艇のLSTにて佐世保に上陸しました。

復員手続や身体検疫の後（二、三日後）に復員列車にて故郷に向かいました。鉄道沿線の各都市が丸焼けで瓦礫の山となっている状態は大きなショックでした。そのような窓外の景色を眺めながら、過ぎ去った戦場のことや頭の中で走馬灯のごとく走りました。と同時に、日本の再建を思いつつ十二月二十三日、西那須野駅に到着しました。我が家まで二時間の道程を歩きながら、出征前のごや将来を思いました。

玄関を開けて、「今帰った」と一言。後は言葉なしです。両親もただ茫然と私の顔を見ていました。万感胸に迫り声もなく、ただ涙のみでした。

暁に散りしという

我が飛行第六十戦隊

三重県 藤原長録

私は昭和十四年一月十日、岐阜県稲葉郡各務ヶ原、第一航空教育隊第二中隊に入営し、ここで第一期の教育を受けることとなり、飛行兵、機関工手として、六カ月間の教育訓練を受けました。

こうしたうちにも支那事変は一方的に拡大し、またノモンハン事件なども含めて、いやが上にも国を挙げたの総力戦へと一步、一步進んでいたのです。

同年六月二十五日機関工手を命ぜられ、同日飛行第六十の戦隊に転属させられ、まず原隊ともいう飛行第七戦隊浜松重爆撃機隊に配属、と同時に動員下令、六月二十九日宇品より輸送船に乗り兵馬共々に、七月二日北支大沽たいくに上陸しました。これより輸送車両により、北京郊外南苑飛行場に着いたのです。この時期のこ